

凡 例

一、本現代語版について

- (一) この現代語訳は、『浄土真宗聖典（註釈版 第二版）』（以下『註釈版聖典』という）を底本として作成した。
- (二) 本文のはじめに、内容についての解説を付した。
- (三) 付録として、『御伝鈔』『御俗姓』は『浄土真宗聖典（原典版）』所収のものをそれぞれ掲載し、あわせて親鸞聖人御絵伝、親鸞聖人略系譜、親鸞聖人略年表、親鸞聖人史蹟略図、京都聖蹟略図を掲載した。

二、表記について

- (一) 本文は、適宜改行を行い、また、利用の便宜をはかるため、『註釈版聖典』に準じて一連の番号を付した。
- (二) 本文中の書名には『』を付し、引用文等には「」を付した。また「」内の符号は（ ）とした。
- (三) 漢字は、原則として常用漢字を用い、従来、浄土真宗本願寺派で慣用されている「智、慧」等の漢字は残した。
- (四) 送り仮名は、昭和四十八年六月の内閣告示（昭和五十六年十月一部改正）にもとづく現行の送り仮名

例

凡

例 法に従った。なお、現在の送り仮名の表記の傾向にかんがみ、省略が許容されるものについては省略した。

凡 ⑤ 振り仮名について

- ① 原則としてすべての漢字に振り仮名を付した。
② 読み方に揺れのあるものについては、() 内のように表記した。

例 円融(えんにゆう)、南無(なむ)

(六) 付録の親鸞聖人御絵伝と対応する箇所については、各段落のはじめの本文下の欄外に示した。

例 一 函解 □ 〓 四 参照。

三、註釈の種類と内容について

(一) 本文に施した註釈は、①脚註、②訳註の二種類である。

(二) 脚註は、とくに説明を必要とする語について、本文右傍に*印を付し、本文下の欄外に示した。原則として*印は各聖教の初出にのみ示した。

(三) 訳註は、従来の解釈の分れる箇所や、留意すべき重要な箇所について、本文右傍に※印を付し、巻末に本文の頁数を付して、まとめて掲載した。

目次

凡 例

御 伝 鈔 二卷……………一

上 卷……………三

下 卷……………三二

御 俗 姓……………三七

訳 註……………四三

付 録

御伝鈔―『浄土真宗聖典(原典版)』所収……………六

御俗姓―『浄土真宗聖典(原典版)』所収……………二三

親鸞聖人御絵伝……………三三

親鸞聖人略系譜……………四七

親鸞聖人略年表……………五二

地 図(親鸞聖人史蹟略図・京都聖蹟略図)……………六三

目 次 浄土真宗聖典(現代語版)の刊行にあたって……………六九

御ご

伝でん

鈔しょう

本書は、『本願寺聖人親鸞伝絵』『善信聖人親鸞伝絵』、あるいは単に『親鸞伝絵』とも称されている。もと宗祖親鸞聖人の曾孫にあたる第三代宗主覚如上人が、聖人の遺徳を讃仰するために、その生涯の行蹟を数段にまとめて記述された詞書と、各段の詞書に相応する図絵からなる絵巻物として成立したが、写伝される過程でその図絵と詞書とが別々に分れて流布するようになった。そしてこの図絵の方を「御絵伝」、詞書のみを抄出したものを『御伝鈔』と呼ぶようになったのである。

本書の初稿本であろうとされるものは、親鸞聖人三十三回忌の翌年、永仁三年（一二九五）覚如上人二十六歳の時に著されたものとされているが、覚如上人は晩年に至るまでそれに増訂を施して諸方に写伝されておられ、その過程で生じた出没、異同、構成形態の変化などが諸本に見られる。

現行のものは上・下二巻、計十五段からなっている。上巻八段にはそれぞれ、(一)出家学道、(二)吉水入室、(三)六角夢想、(四)蓮位夢想、(五)選択付属、(六)信心評論、(七)入西鑑察の記事が、また下巻七段にはそれぞれ、(一)師資遷謫、(二)稲田興法、(三)弁円清度、(四)箱根靈告、(五)熊野靈告、(六)洛陽遷化、(七)廟堂創立の記事が掲載されている。

本願寺聖人親鸞伝絵 上

二 第一段

親鸞聖人の出家前の氏姓は藤原氏であり、天兒屋根尊から数えて二十一代目の大織冠藤原鎌足、その玄孫の近衛大将、右大臣、従一位藤原内膳公、その六代後の弼宰相、日野有国卿、その五代後の皇太后宮大進、日野有範公の子息にあたる。このようなわけで、聖人は本来、朝廷で天皇や上皇にも仕え、栄達の道を開きもするであろうお方であったが、仏法を盛んにしてあらゆるものを救おうとする因縁がはたらいたことにより、九歳の春、伯父の従三位日野範綱卿が前、大僧正慈円の住坊にお連れし、そこで剃髪し出家されたのである。そのとき範宴、少納言公と名乗られ

二 図解□〓四参照。

天兒屋根尊 記紀神話に出る神。中臣氏（宮廷の祭祀をつかさどった氏族）・藤原氏の祖神。
大織冠 天智天皇が改訂した冠位の最上位。藤原鎌足しか授与例はない。

藤原鎌足（六一四—一〇六九）中臣鎌足のこと。藤原氏の祖。原文の細註に「鎌子内大臣」とある。

玄孫 曾孫の子。孫の孫。
近衛大将 宮中の警衛を司る近衛府（令外官）の長官。
右大臣 左大臣を補佐した太政官の政務を司る官職。原文の細註に「贈左大臣」とある。

従一位 官人の序列を表す等級。正一位に次ぐ位階。

藤原内膳（七五〇—一〇二二）藤原真楯の三男。原文の細註に「後長岡大臣と号し、

た。それから、よく南岳慧思・天台智顛に始まる天台宗の奥深い教えを極め、広く三觀仏乗の道理に精通し、連綿と伝わる比叡山横川の源信和尚の流れを受け継ぎ、深く四教円融の法義を明らかにされたのである。

三 第二段

建仁元年の春、比叡山での名声を捨てて念仏の法義を求める思いに動かされた親鸞聖人は、源空聖人の吉水の住坊をお訪ねになった。それは、釈尊の入滅から長い年月を経て資質の衰えた人々にとって、限られたものしか歩めない難行の小路は迷いやすいことから、すべてのものに開かれた易行の大道を求めようとしたのである。浄土真宗の教えを受け継ぎ盛んにされた源空聖人が、極め尽くされたその教えの奥深い道理を説き述べられたところ、親鸞聖人はたちどころに他力のはたらきに摂め取られる教えの真意を

体得し、どこまでも凡夫のままに往生する真実の信心を決定されたのである。

三 第三段

建仁三年四月五日の深夜、明け方に親鸞聖人が夢のお告げを受けられた。『親鸞夢記』には、次のように記されている。

「六角堂の本尊である救世觀音菩薩が、廠かで端正な顔立ちをし、尊い僧のお姿を現し、白い色の袈裟を着けて広大な白い蓮の華の上に姿勢正しくお座りになり、聖人に、へもし行者が過去からの因縁により女犯の罪を犯してしまふなら、わたしが美しい女の身となりその相手となろう。そして一生の間よく支え、臨終には導いて極楽に往生させよう」とお告げになり、そして、へこれこそがわたしの誓願である。そなたはこの真意を広く説き伝え、すべての命あるものに聞かせなさい」と仰せになった。そのとき、聖人が御堂

あるいは閑院大臣と号す贈正一位太政大臣房前公孫、大納言式部卿真福息なり」とある。

弼宰相（弼は違法行為を監察する彈正台の次官。宰相は政務を審議する參議（公平外官）の官職。）

日野有国（九四三—一〇一一）藤原有国のこと。

五代後 有範は有国の六代の孫にあたる。ここでは有範の父経尹を省いた系図によつたと考えられる。

皇太后宮大進 皇太后宮職の第三等官。

日野有範 生没年未詳。親鸞聖人の父。皇太后宮大進を退いた後、山城三室戸（現在の京都府宇治市）に隱棲したという。

従三位 官人の序列を表す等級。正三位に次ぐ位階。日野範綱 生没年未詳。親

鸞聖人の伯父。後白河院に仕えた後、出家して觀真と名乗つた。原文の細註に「時に従四位上前若狭守、後白河上皇の近臣なり、上人の養父」とある。
大僧正 僧官の最上位。
少納言 太政官の庶務を行う官職。ここでは親鸞聖人の呼び名（仮名）。

天台宗 智顛によつて大成され、最澄によつて日本に伝えられた法門。『法華經』を出世本懐の教えであるとす。

三觀仏乗の道理 天台宗の根本的な教え。空・仮・中の三種の觀法によつて生きとし生けるものがさとりを開くとする教え。

比叡山横川 比叡山延暦寺内の一地域。比叡山三塔の

の正面から東の方を見ると、険しくそびえ立つ山があり、その高い山に数え切れないほど多くの人々が集い群がっているのが見えた。そこで仰せの通り、その山に集う人々すべてに対し、誓願について説き聞かせ終わったところで、夢から覚めたのであった」

よくよくこの記録を拝読して夢の内容を考えてみると、これはただひとえに、浄土真宗が盛んになる兆しであり、念仏の教えが広く知られることを表している。そうであるから、聖人は後に、次のように仰せになつてゐる。

「仏教は昔、遠く西のインドに興り、その経典や論書は今、はるか東の日本に伝わっている。これはひとえに聖徳太子の広大な徳によるもので、その徳は山よりも高く海よりも深い。かつて欽明天皇の時代に仏教がもたらされたことで、浄土の教えのよりどころとなる経典や論書も伝来した。そのとき、もし聖徳太子があつた

ご恩を施してくださいさならなかつたら、どうして愚かな凡夫が阿弥陀仏の本願に出会えたであろうか。救世観音菩薩とはすなわち聖徳太子の本地であり、仏法の興隆を願つて太子としてお姿を現されたことを知らせようと、本地としてのお姿を示されたのである。またそもそも、もし源空聖人が流罪とならなかつたなら、どうしてわたしもまた流罪の地におもむくことがあつたであろうか。そして、もしわたしが流罪の地におもむくことがなかつたなら、どうして辺境の地の人々を教え導くことができたであろうか。これもまた、師である源空聖人のご恩によるところである。源空聖人とは勢至菩薩の化身であり、聖徳太子とは観音菩薩が現されたお姿である。そうであるから、わたしは二菩薩のお導きにしたがって、阿弥陀仏の本願を広めているのである。浄土真宗はこのようにして興隆し、念仏はこのようにして盛んとなつてゐる。このことは

四教円融の法義 天台宗の根本的な教え。藏・通・別・円の四教を立てて釈尊一代の教説内容を判別し、その究極である円教の内容を三諦円融の理で解説する。

二 函解因參照

建仁元年 一一〇一年。親鸞聖人 原文の細註に「上人二十九歳」とある。

吉水 京都市東山区にあつた地名。現在の知恩院の東方一帯を指す。

難行 修しがい行法。種々の困難な行を修めて仏にならうとすること。易行 対する語。

易行 修しやす行法。阿弥陀仏の本願を信じて念仏すること。難行に対する語。

浄土真宗 往生浄土の真実の教え。真実の教である

「天経」に説かれた阿弥陀仏の選択本願を指し、具体

的には弘願他力の念仏成仏の教えをいう。

他力 阿弥陀仏の本願力。阿弥陀仏が衆生を救済するはたらき。

凡夫 愚かなものの意。真理にくらく、煩惱に束縛されて、迷いの世界を輪廻するもの。

二 函解因參照

建仁三年 一一〇三年。親鸞聖人三十一歳。原文の細註に「癸亥」とある。「恵信尼消息」第一通には、比叡山を下り六角堂に参籠して源空聖人のもとへ行かれたと記されている。

親鸞夢記 同書は存在しないが、高田派専修寺に「親鸞夢記云…」（真上人書写）と記す文書が伝わる。

六角堂 現在の京都市中京区六角通東洞院西入ルにあ